

## 『麗気記』にみる中世——神道思想研究の新たなる視座を求めて——

三 橋 正

中世神道思想が日本思想史研究の重要なテーマであることは誰もが認めており、一九七七年には日本思想大系の一冊として『中世神道論』が刊行されている。しかし、中世前期の神道書の多くは、その成立過程すら明らかでなく、内容の検討も十分になされていない。両部神道（真言神道）の代表的な書とされる『麗気記』もその一つで、本書について研究し、思想的な位置付けをすることは重要である。

『麗気記』は伊勢神宮（内外両宮）の歴史・社殿・神宝・神体などについて書かれたもので、これに関連して麗気灌頂という密教的な伝授もなされていた。その内容には『日本書紀』や『神道五部書』を基にした部分があるもの、すべての巻に密教的解釈が盛り込まれ、非常に難解である。

すでに『弘法大師全集』と『神道大系』（真言神道・上）に活字化され、『日本思想大系』（中世神道論）に「天地麗気記」のみ書下し文と注釈が付けられている。けれども、それらでは正確な『麗気記』像を描くに十分といえず、依然、ごく一部の研究者が部分的に引用・考察するに留まり、多くの人々から敬遠されているのが現状である。

このような状況を憂えて、私たちは一九九四年に「神仏習合研究会」を結成し、大正大学総合佛教研究所から助成金を得て、『麗気記』の読解を試みはじめた。その主要目的は、『麗気記』を理解・解説することであり、書下し文と語注を付けるだけでなく、全文を現代語訳して、必ずしも中世神道史研究を専門としない人々にも読んでもらおう

とした。また、既刊の活字本に不備が多く、必然的に諸本の調査と校合を進めて校本を作成し、更に従来にはない諸本のヨミ（ルビ）を比較対照することにした。そして、その前半の作業を終了し、二〇〇一年八月の刊行へと結びつけた（大正大学総合佛教研究所神仏習合研究会編『校註解説・現代語訳 麗気記Ⅰ』法蔵館）。

本パネルでは、これまで研究会で行なってきた成果の一部を示しながら、『麗気記』の構成・言説・凶像・註釈などについて、それぞれの見解を発表し、そこから明らかになる中世神道思想の発生と展開について、考えてみたいと思う。

（大正大学非常勤講師）